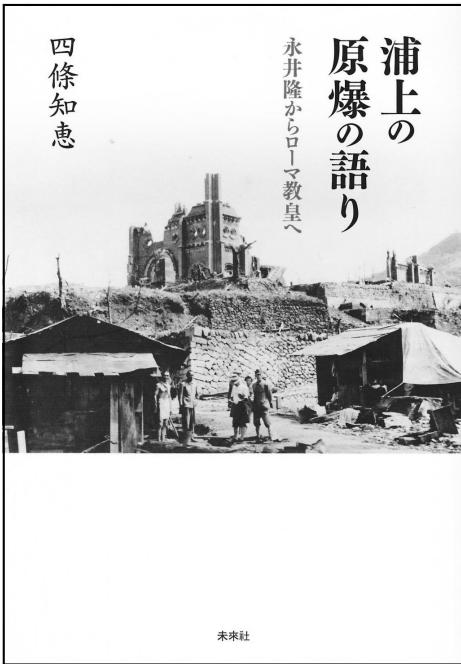


四條知恵著 『浦上の原爆の語り——永井隆からローマ教皇へ』

黒川 伊織



浦上の 原爆の語り

永井隆からローマ教皇へ

四條知恵

未来社

被爆三世として広島に生まれ育った評者が不思議に思ってきたのは、長崎の原爆記念日が報道される際に、必ずといっていいほど、祈りを捧げるカトリック女性の写真が用いられることである。たしかに浦上は一六世紀以来キリスト教の信仰を守る地であり、多くのカトリック信者が暮らす地であるが、評者には三菱系の軍需工場が集中していた地という印象の方が強かったからだ。実際、一昨年から広島・長崎の被爆体験記を読み進めてくるなかで、長崎原爆の被爆体験記のうちには三菱系の工場の工員や動員学徒の著した体験記が非常に多い、という印象をあらためて抱いてもいた。

ところで、長崎原爆による死者の割以上が浦上のカトリック集団であるにも関わらず、なぜかカトリック集団による被爆体験記の数は少ない。本書は、このようなカトリック信者の「沈黙」の背景に、占領下で長崎の被爆体験の語り手として特権的な位置を与えられた永井隆の存在を見いだす。「燔祭説」として知られる永井の語りは、浦上のカトリック集団による原爆の語りによりの

ような影響を与え、長崎原爆の語り一般とどのように関わったのか。このような問いに答えるべく本書が行うのは、詳細な語りの分析である。まずは、本書の構成を示しておく。

第一章 歴史の語りを繙く

第二章 浦上と永井隆

第三章 焦点化する永井隆

第四章 永井隆からローマ教皇へ―純心女子学園をめぐる原爆の語り

第五章 浦上の原爆の語り

結び

「祈りの長崎」を象徴する浦上のカトリック集団に着目した四條氏のご研究から学ぶことは実に豊富だった。原爆研究に関する先行研究の博捜にはじまる本書は、その実証性の高さに加え、「歴史の語り」を構成する諸要素にいかに接近するのかがという点でも示唆に富んだ叙述となっている。これほどの実証性を担保するにあたって、浦上のカトリック集団に寄り添おうとする四條氏の献身があったことは容易に想像できる。

「燔祭説」として知られる永井の語りと浦上のカトリック集団の沈黙とが織り成す歴史を読み解くと、カトリック集団の沈黙の背景に、辛うじて生きのびた人々が抱え込む「生き残った」ことへの深い罪悪感が刻み込まれていることを私たちは知る。広島でも長崎でも、生き残ったことへの罪悪感を抱え込んで生き抜いた被爆者は多くいる。しかし、カトリック集団の母なる地・浦上は、

長い迫害をとまにくぐり抜け、荒廃した地を耕し、教会に日夜祈りを捧げる人々が緊密な絆のもと暮らす、極めて強固な地域共同体だった。それゆえに、共同体の絆を破壊し尽くした原爆投下の衝撃は、生き残った者に強い罪悪感を抱かせた。その浦上の共同体が再び結集する際、「浦上への原爆投下」は「神の摂理」であり、その死者を「よき人」であったがために「神に召された」存在と位置づける永井の「燔祭説」は、辛くも生き残ったカトリック集団の人々を倫理的に救う言説となるのである。カトリック集団の内部に分け入ってこの点を確認したが、本書の第一の成果であるといえよう。

そのうえで、永井の言説が長崎全体における原爆投下の意味づけにはほとんど影響を与えなかったという本書の指摘は、永井の「燔祭説」を自明としてきた従来の研究に再考を迫る本書の第二の成果となっている。カトリック集団の外部にとつて永井の言説は、その言説の占領軍との親和性を利用して価値を認めて、「祈り」のイメージを復興に利用したに過ぎなかったといえるだろう。実際に、原爆投下による被害を最小限にとどめた長崎の旧市街では、貿易や観光に力点をおいて復興を実現しようとしていた。その限りで、浦上は、長崎の復興において従属的立場を与えられているに過ぎず、その従属的立場を受け入れるかのように浦上のカトリック集団は沈黙を守って生きてきた。

その浦上から被爆体験を積極的に発信する転回点となった出来事が、一九八一年のローマ法皇ヨハネ・パウロ二世の長崎訪問である。本書のなかで、評者が四條氏からの強いメッセージを感じ取ったのは、本書第五章の最後にある「教皇ヨハネ・パウロ二世

の発言をきっかけに、教会が組織として動き出すなかで、浦上の原爆の語りは永井隆の影響の名残から抜け出し、ダイナミックに変容することになった」という一文である。「長崎の証言の会」や在外被爆者救援運動に取り組み、今年一月に逝去された広瀬方人さんがカトリックでいらしたことを、評者は本書で教えられた。廣瀬さんや故・片岡津代さんからカトリックから被爆体験を発信し続けた人の原点にローマ教皇の存在があることは、規律としてのカトリックがもつ普遍的意味を読者に問うものであるだろう。

このように研究史上に大きな意義をもつ本書ではあるが、全体に抑えた筆致であるがゆえに、叙述がやや平坦に終わってしまったことに、評者は物足りなさを抱いた。その一因に、地域紙や被爆体験記の叙述の分析（第二章・第三章）というメタレベルの作業に閉じているという方法的問題があるだろう。たしかにカトリック集団内部での「燔祭説」の受容過程は精緻に解明されているものの、カトリック集団内部での「燔祭説」の受容が長崎の地域社会におよぼした影響力が、説得的に明示されているとはいえない。たとえば、浦上のカトリック集団が、長崎の他集団と接点を持つなかで生じた相互の軋轢や連関などに着目するなら、長崎における「浦上」の位置づけもより現実的に即したかたちで読者に提示されたいだろう。その限りで、「集団のなかで語りはどのようなにせめぎあい、いかなる理由で変容していくか」を明らかにするという四條氏の目的は、カトリック集団のなかでは達せられていても、長崎の地域社会という大集団のなかでカトリック集団の語りだけが孤立してしまっている印象を読者に与えてしまう。実際にある時期まで、長崎におけるカトリック集団は孤立していたの

かもしれないが、長崎におけるさまざまな集団の語りのなかで、浦上のカトリック集団の語りの違いをより明確にするのなら、このような方法的問題は克服されるべきであると感じた。

カトリック集団の変容という点でいえば、本書ではローマ教皇の長崎訪問が強調されているが、世界的規模でのカトリック教会の変容を推し進めたのは、第二バチカン公会議（一九六二―六五年）の開催だった。カトリック教会が社会的弱者の救済に舵を切ったこの会議の歴史的意義に言及されたなら、浦上のカトリック集団の語りが果たした役割がより明確になっただろう。さらに、同時代長崎における他のキリスト教集団の動き——たとえばルーテル教会と岡正治牧師の活動——をどのように浦上のカトリック集団が見ていたのかといった、浦上のカトリック集団を相対化する視点が導入されたならば、カトリック／プロテスタントを問わずキリスト者が日本の戦争責任／戦後責任問題を問い直していったことの意義が、日本のキリスト教発祥の地である長崎に即して明らかにされたはずだ。原爆投下の責任を問うことは、日本の戦争責任／戦後責任を問うことでもある。原爆投下を神の意志とした浦上のカトリック集団の「語り」の変容から日本の戦争責任／戦後責任を問い直す作業は、今後の研究において避けては通れない課題となるだろう。

そして、本書が残すことになった最も重要な課題としては、被爆者の「語り」が生まれてくる場面を歴史研究のなかでどう扱うか、という問題があるだろう。この問題は、長崎に即した原爆に関する歴史研究が少ないという四條氏の指摘する問題とも関わる。たしかに広島では、敗戦直後からさまざまなかたちで被爆体

験が発信されてきたが、その発信は極めて限定的な立場からなされてきたことに注意すべきだろう。たとえば、広島での被爆体験を描いた大田洋子も原民喜も峠三吉も栗原貞子も、小説や詩を書きうるだけの筆力を持つていたという限りで特権的立場にあつた。多くの被爆者は、語ることにすらできないまま日々を生き抜くことに必死だつた。そのような被爆者に発話を促した山代巴ら戦後の文学運動の担い手の努力と献身は並大抵のものではなかつた。評者は、一九六〇年代後半にはじまり今も粘り強く続けられる「長崎の証言の会」の運動のなかに、かつての山代巴らの経験につながるものを見いだしている。「長崎の証言の会」の結成に中心的役割を果たした鎌田定夫も山代らと同じく文学運動の担い手であつたことは、偶然の一致ではないだろう。一九六〇年代前半までは広島が被爆体験の「語り」において主要な立場を担つたが、おそらくは原水禁運動の分裂への対応のあり方とも関わつて、一九六〇年代後半から現在に至るまで、長崎こそが粘り強く被爆体験を発信し続けている。その歩みを跡づけることに原爆をめぐる歴史研究の可能性が見いだされるのではないだろうか。

(二〇一五年八月一五日 未来社 二三四頁 二五〇〇円＋税)